

造花術は女子の手藝として最も優艶で然も必要なと
は、更めて申し上の迄もなく、神田一ツ橋の女子職
業學校を始め、其他各所の女學校で樞要の科目とし
て採用されて居ります。全體我邦の人々は、手藝の
事には巧妙な技能の特質を持て居ります爲め、其技
術は年一年と進み、時には舶來品も及ばぬ位な立派
な造花を製作して、世人の賞讃を博して居ります。殊
に近來は束髪の流行に伴つて、花束の需要が著るし
く増加した結果、斯道の發展を促して、一見實物か
と疑はるゝやうな造花が現はれて來ましたのは、眞
に喜ぶ可きことであります。併しながら此造花は編物
など少し違ひ、多少六ヶ敷仕事ではありますが、
しなくては、眞の造花として誇る
譯には行かないのです。

▲就業の順序▼



造花は前に記す通り手藝中の高尙
優美な仕事ですから、從つて慎重
の態度を取つて、一意專心眞偽を
辨じ難い位巧に製作するの心を以
て初に器具一切を取揃へ、豫め出
來の時間と、製作の難易を見定め
て置き、全部終結する迄は毫も倦
怠の心を起さず、一枝一花に對し
ても、丁寧に取扱はねばならぬ。
萬一中途で粗雑放漫に流れると、
折角の苦心も水の泡と消えて、美
術は倏ち玩弄物と變つて捨られて

仕舞はれます。先づ仕事に着手する
前に、作る可き花に用ゐる一切の
材料器具を机の上に並べ、染色等
を爲す場合に衣類の汚れないやう
に、胸當なり前掛を締め、次に花
瓣と葉身を染損じ等の憂ひを見込
で一定の數より二三枚餘分に切斷
ち置き、傍の染臺には染色の濃淡
を見究め小さい皿又は盆に溶解
して置くのです。染色の順序は、
初に染色から濃色等を染め、染出
かし、其乾く間に他の必要品を作
り置き、尙鍛を焼き置くなど萬事
に就けて手落のないやうにとそれ
ぞれ注意して整へて置かねばなり
ませぬ。

造花術



造花術は女子の手藝として最も優艶で然も必要なと
は、更めて申し上の迄もなく、神田一ツ橋の女子職
業學校を始め、其他各所の女學校で樞要の科目とし
て採用されて居ります。全體我邦の人々は、手藝の
事には巧妙な技能の特質を持て居ります爲め、其技
術は年一年と進み、時には舶來品も及ばぬ位な立派
な造花を製作して、世人の賞讃を博して居ります。殊
に近來は束髪の流行に伴つて、花束の需要が著るし
く増加した結果、斯道の發展を促して、一見實物か
と疑はるゝやうな造花が現はれて來ましたのは、眞
に喜ぶ可きことであります。併しながら此造花は編物
など少し違ひ、多少六ヶ敷仕事ではありますが、
しなくては、眞の造花として誇る
譯には行かないのです。

▲造花の心得▼

造花を學ぶには第一着に天然の花卉草木に注意して
一葉花殆んど實物に違はざるやうに、摸擬するの
が最も肝要なのです。であるから櫻なり薔薇を造る
には、一應天然の目標たる實物に當つて、枝態から
葉、花瓣を仔細に調べ、其の上で着手したならば、
假令技術に巧拙があらうとも、櫻花は櫻花、薔薇は
薔薇に見えるに相違ない。夫に葉には互生葉と對生
葉とあつて、各々發生を異にして、百合花のやうに葉
が互違ひになつて居るのもあれば、薔薇や牡丹のや
うに一葉の外は對向て居るなど、極めて複多趣で
あるから、注意に注意を加へて枝、小枝、葉、薔、
芭等を爲す場合に衣類の汚れないやう

一通りの器械を取揃へて、倦まず撓まず精を出せば
誰にも出來る技術ですから、婦女子の身に取りまし
ては裁縫、編物に讓らぬ家庭の仕事でせうと思つて
居ります。

すから、瓣の凸凹と筋の深淺を充分見極め、深い筋を現はさうとするには、鎌の熱度を強く爲る、又浅い時は手加減で弱く押へ、材料の異なる度每熱度を計つて布の光澤と染色を變らせぬやうに心懸け、一瓣毎に注意し、眞の花冠に見紛ふ許りに形狀を作るのが肝要でムいます。瓣取は鎌の異なる毎に相違するものですから、其使用法の詳細は後に申し上げます。

▲器具と材料▼

器具は其種類が澤山あります。大體を申すと鎌、鎌台、机の四種でムい升。併し、ながら鎌は前に記した通り、花瓣や葉の瓣を取る器



けれど差當り是文け申上て置ます。

又鎌は机や庖丁

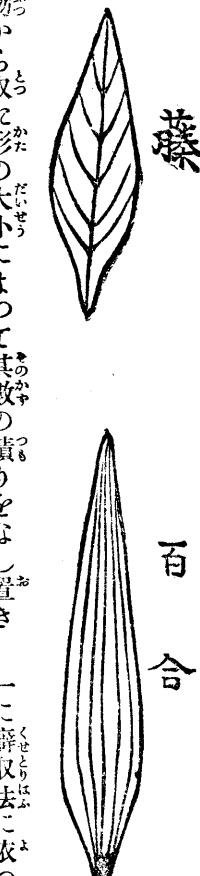
▲切斷法の事▼

花瓣を切斷んとするには、最初實物を見較べ、大小不同があれば各一枚宛を探て厚紙に貼着け、縁を切り取て標準と爲る。造花は花の大小、長短、廣狹のです。造花は花の縁には多く鋸歯があつて一定して居らぬのを、鎌で截断のです。雖然餘り大きな花や不同的の物は折重ねた四方を針で堅くとめなくては正形の物が截断てませぬ。又葉形の物があつて一定して居らぬのを、鎌で截断のです。かく、却々六ヶ敷い技術でムいますが、少し呼吸を覺えれば左まで苦心せずとも、實物に依て出来得るやうになります。

百合

▲瓣取法鎌仕用法の事▼

花は其形狀が一様になつて居らず單瓣もあれば重瓣もある。其を一に瓣取法に依つて形狀を掩へ、趣味を現はすので



鎌、筋鎌、菊筋鎌の四大通りなく五分位から一寸迄圓鎌の大きさは花瓣の大中小の三挺、菊筋鎌は一筋、二筋、三筋の三挺、筋鎌は一挺を取揃へて置かねばなりませ

瓜を糊着にするのですから、花の大小、長短、廣狹を見究め、實物よりも少し大きく切て瓣形とし、是を標本に布或は紙等を切斷ば、切屑の出来るとも少なく、又時間を空費にするともない。例を示すと實

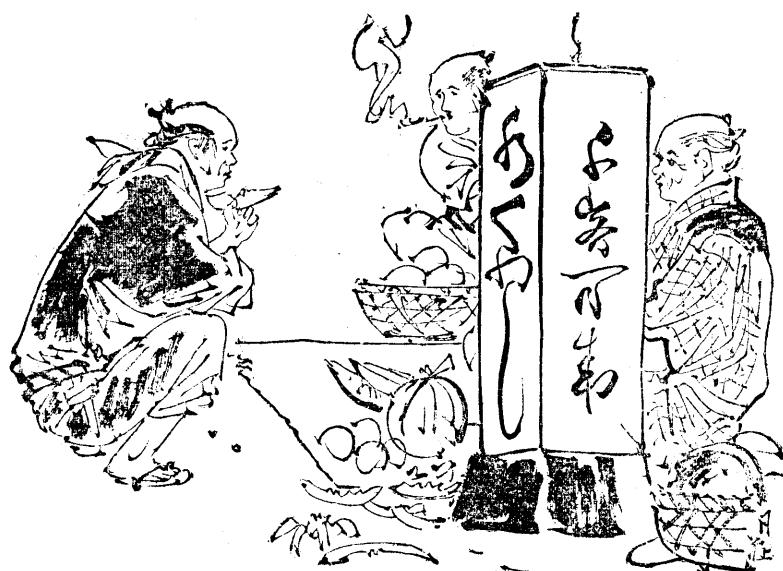


布若くは紙を八つ折位に折重ね、實物から取た形を布の面にあて、鉛筆で輪廓を書き、切斷するには注意して左手の拇指と食指で堅く押へ、鎌を右の手に持て書いた輪廓の内廻りから順次に切廻す時は八枚切れる許でなく、其形狀が揃つて見弊があります。雖然餘り大きな花や不同的の物は折重ねた四方を針で堅くとめなくては正形の物が截断てませぬ。又葉形の物があつて一定して居らぬのを、鎌で截断のです。かく、却々六ヶ敷い技術でムいますが、少し呼吸を覺えれば左まで苦心せずとも、實物に依て出来得るやうになります。

皆買入るのは容易でない。許りでなく、中には全然用ゐない色もありますから、差し向き需要の廣い左の品々を買整へて置けば、何色でも出来ませう。

スカラット(深緋色)、フロクシソン(桃紅色)、ロー・ダーミン(淺赤色)、コングレット(朱色)、エルロー(茶黄色)、ケンダ(深紅色)、オーラミン(黄色)、レモン・エルロー(橙黄色)、イエローブラウス(茶黑色)、リーン(青綠色)、チカゴ・アリューネ(藍色)、クリスター(紫色)等で別に光澤用の原料とし

てバラビン、白臘、ワニスとばかり染を爲る時の用意



にアルコールを整へて置けば宜しいのです。

▲着色と貼着▼

着色とは染色の及ばない微細な點を筆で書き加へ又斑點を現はす爲め、適當の器具を用ひて着色を施すのです。薔薇の絞、百合花の花紋、薔薇の葉等は面上に霧を吹懸した様に着色しなければならない。着色の主とする所は染色をして更に完全にする爲めでは「霧ばかり」と稱へて簡易な器具をも出来て居ります。貼着とは花瓣を排列して花冠を造り

と違ひ、火に入れて焼くのですから、同一物が二通りないと焼る間無益に遊ぶやうなことが出来致します。又材料の重立た物は布で絹、寒冷紗、羽二重、絹天、絹天フラシ、フランシ天、シホン、ヌメ、縫子と薄美濃、厚美濃、雁皮紙其他では鹿の毛、護謨管、大小の中の筆、ピンセット、糸、ゼラチンと上新粉、麥粉、天下粉、ツラカント護謨、亞刺比亞護謨等の糊の種類、膠晒チヤンと綿、竹、針金と染料でムいます。以上の器具材料を求めるには本所元町一丁目の桑原本店へ行くと販賣して居ります。

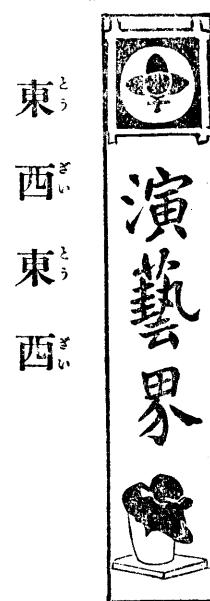
▲染色の研究▼

石版繪や繪葉書ですら、彩色と來ると多少研究した上でなくては、到底人々を満足させる譯にはいかないのですから、真正美術の造花に實物と見紛ふ許りに彩施すには幾多の研究と日子とを費した所謂實地經驗に就て習得した染色法を應用し、生徒や門

下生へ授けては居りますが、花卉草木は種類が益々増加しますから、却々教へられた丈けで充分に出来る譯のものではなく、各自身が實物を熟観し何と何を混合すると此色になる位な考へを起し、試験をして見るのが一番肝要でムいます。天工の花若くは其葉の色は如何にしたらば斯くの如き色になるであらうかと、長時間頭を悩す面倒なのがある許りでなく葉の形狀が千差萬別百種百態と來て居るから、一個の花なり葉を作るにも、仔細に實物を調べ、色の餘り相違しないやう、豫め染料を溶し、甲と乙を混合すれば何々の色となり、更に是へ丙を加へると何色になるかを試験し、其上で材料の布なり紙を染たならば間違ふとは先づないと斷言する事が出来ます。萬一試験の上若し思ふ色の出来ない時は本郷元町二丁目秀美園へ御照會になれば早速無料で御教へ致しますから、御遠慮なく往復郵便で御問合せ下さい。尙ほ染料は其種類が極めて多くムいますから、一時に悉

△今年の流行もの、繪葉書、地震、慈善會、追善興行、それに素人芝居。その素人芝居についてチクトン許り御饅舌を致して見ませうか。

△われ／＼の知つてゐる範圍内では、本年の素人芝居の急先鋒は、先外國語學校の外國語劇に指を折らねばなるまい。その頃から噂の有つたのは、新聞劇評家中の美男子のみを集めた若葉會のであつたが、これが忌にぐづいて却々蓋が明かぬ中に、おあとからお先へ御免蒙つたのは、明星派の新詩演劇、知十坊門下の俳士演劇、早稻田派の雅劇、と如斯矢繼早やに、氣の弱いわれ／＼を脅かして、さてドン尻に



東

西

東

西

松居 松葉

△控へたは素劇「若葉會」。

△これはみな様先刻御承知の通り、何しろ今まで風説がまづ大變で、いよ／＼となると場所は名に

負ふ日本一の歌舞伎座、衣裳も髪もすべて大歌舞伎で、小道具も與兵衛の粹を持出し、お囃子は六左衛門兄弟、後見は菊五郎、八十助、部屋は故闇十郎ので、顔を作るのがあやめに梅助、中には浴衣まで本職らしいのを借りて着た人もあるといふ凝かたであるから、この大業な點だけでも、足山ノ手を出でず、目壯士俳優しか見た事のない文士連を驚かすに足りたのに、演る事がまた憎い程巧い、腕白の大將岡鬼太郎など來ると、素人にして置くのは惜い位、土間に居た元祿塾者連がボーッとして見て居たと、その側に居た小説家なにがし先生の説であるが、但し

是に微細な蕊等を糊着にするのですが、其順序を誤らないやうに心懸けるのが最も肝要です。貼着の順序は花の何れに拘らず、初に蕊と萼とを作り、之に花瓣を貼着する時は至極容易に出来上ります。

▲組上る方法▼

花瓣の染色と着色が済み、蕊と萼とが出来上つて之へ花瓣を貼着してから更に蕾に取着けるにも其々順序があります。先づ花序葉式として蕾と花を枝に取着け、葉を複葉に組合せて一見眞に着生して居る様に現はすのが、造花術の真髓とする所です。先づ最初に葉の互生、對生、散生、輪生或は無柄に組合する物と長柄に組合する物、根出に組合する物とを見分け、花も亦眞の着生の排列に組上るには長軸を有するのと有せない物、無梗と有梗、頭狀花、繖形花、聚繖花等各着生を異にして居るのを造花術のやうに作り上るのは容易の術ではありません。例を示すと

櫻のやうな繖形花を作るのは、花梗も長くて組合せも易く、眞の排列を寫すとが出来て花配が見易くて見分け難いのもあり、一軸に一花の少ない福壽草、葉の互生して居る百合花、小葉の複葉を組合せる藤萩等は何れも日常實物に就て充分見て置かなくてはならない。又葉には掌状、羽状、射出の脈がある。

之は細鑊の一種で自由に現はすとも出来、尙支脈に至る迄眞の葉形のやうに鑄出す一定の器具を用ゐれば、其壓力に依て初學者でも容易に實物を現すことの出來得る押器があります。(本郷東郷造花店工場主談)

慢自じゆ手術

歯醫者の甲「僕が手術すると、患者が皆な嫌でした」と云ふが、治療の妙も茲に到ると、眞に神の如しだや!」

歯醫者の乙「アツハ、君の患者は寐て了ぶのか。僕の方は患者が左も右も好い心持さうな顔閑をするので、其れを寫眞に撮つて置きたい位なんだ」